

volume

116

February

2011

HABATAKI

はばたき

UNIVERSITY OF SHIZUOKA

Yada 52-1, Suruga-ku, Shizuoka 422-8526 Japan

inside NEWS



学長杯争奪学内駅伝大会

CONTENTS

第24回剣祭	1	野外講義「森林生態系の働きと多様性」	13
短期大学部大学祭・橘花祭	2	静岡環境フォーラム21	13
経営情報イノベーション研究科を開設	3	環境科学講座	14
文科省「大学教育推進プログラム」に選定	3	環境リレーコラム、キャンパスの四季をご覧ください	14
大学間連携推進に向けて渡米	4	受賞	15
防災訓練	4	総合食品学講座閉講式	15
国際健康長寿学会議	5	「メディメッセージ2010」で栄養士体験	16
「産・学・民・官」の連携を考えるつどい2010	6	教員人事、新規客員教授等の紹介	16
短期交換留学生が来学	7	学長杯争奪学内駅伝大会	17
留学生交流会	8	経営情報学部・国保ゼミの活動	18
カリフォルニア州立大学サクラメント校 春期英語研修プログラム	8	はばたき寄金からのお知らせ	19
ニューカッスル大学夏期語学研修に参加して	9	活躍する卒業生・修了生	21
オハイオ州立大学夏期語学研修に参加して	10	図書館だより	23
朝鮮半島情勢シンポジウムと日韓大学生合同ゼミ	11	関西薬学生バドミントン大会で6連覇	25
シンポジウム「ブラハのシュタイナー学校」	11	草薙商店街のPRソングを制作	25
薬学講座	12	県大生ピックアップ!	26
排尿障害モデル動物研究会	12	「ふりーらフルーラ」がグッドデザインしずおか大賞を受賞	26
実験動物慰霊祭	12	大学オリジナルグッズを製作	27

第24回剣祭を開催！

第24回剣祭実行委員会委員長 塩谷悠介（薬学部3年）

静岡県立大学の大学祭である剣祭が10月31日（日）に開催され、今年も大盛況のうちに終了しました。

例年は2日間の開催で、今年度は10月30（土）、31日（日）の2日間の予定でしたが、台風の影響で一日目の開催が中止になってしまいました。静岡県内の大学祭が中止になった事例は今までなかったということで、今年は本当に不運だったと思います。しかし、一日のみの開催になってしまったが故に、参加してくれているすべての人が例年よりもアクティブで、剣祭を全力で楽しもうとしているのが様々な形で伝わってきました。今年は例年よりも活気に満ちあふれていた気がします。

剣祭実行委員会が企画した「オトメンコンテスト」では、女の子より可愛くなった（？）女装男子たちを300人程の方が見に来てくださいました。このコンテストでは、新しい試みとして授業のお昼休みに予選会を行いました。この予選会もたくさんの方が見に来てくださったので大成功だったのではないかと思います。また、体育館で行ったハロウィン企画では、子供たちがゲームやジャックオーランタン作りに夢中になってとても楽しんでくれました。その他、お化け屋敷や休憩所、フリーマーケット、後夜祭も大盛況でした。さらに、一般発売から約1週間でチケットが売り切れた清水翔太さんのコンサートも、評判を上回る盛り上がりでした。

各団体による模擬店や活動の発表もとても活気があり、学外からお越しいただいた皆様に県立大生の日頃の活動の成果を見ていただく良い機会になったのではないのでしょうか。

最後に、今年の剣祭に参加してくれたすべての学生、ご来場して下さった皆様、広告・協賛など剣祭開催にあたって協力していただいた皆様、陰で学生を支えてくれた大学関係者の皆様、本当にありがとうございました。

次回もお楽しみに！！



開催前に仮装パレードで剣祭をPR！



剣祭実行委員会のメンバー



たくさんの人が見に来てくれた
オトメンコンテスト



後夜祭

短期大学部大学祭・橘花祭を開催！

短期大学部では、10月31日(日)、「Track Up A Day ～時代に足跡を残す～」をテーマに第14回橘花祭を開催しました。例年とは一味違う大学祭を！ということで、芝生のグラウンドでの模擬店やイベントを計画。忙しい授業の合間を縫って準備を進めましたが、残念ながら、台風の影響で1日のみ屋内での開催となってしまいました。しかし、気持ちを切り替え、実行委員はもとより県短生みんなの素早い対応で乗り切ることができました。

台風一過の日曜日には大勢の方が来校され、工夫を凝らした模擬店や、学科の特色を活かした展示・体験を楽しまれていました。体育館では様々なイベントが行われ、県短生のみならず地域の方々も一緒に盛り上がりしました。入試説明会に訪れた高校生からは「楽しそう！」という声も聞かれたほど、活気ある大学祭を行うことができました。



アトリウムで模擬店開店

県短生のバンド演奏



裏方も頑張りました！ポップコーン作り



入試説明会の様子



茶道部によるお茶会

【実行委員長の言葉】

第14回橘花祭実行委員長 三浦和洋

今回、急遽日曜日1日だけの大学祭となり、スケジュールの変更など色々な問題が起りましたが、実行委員をはじめ様々な人の協力があり無事成功することができました。準備など大変なことがたくさんありましたが、多くの人に助けられ、この学校生活で一番の思い出になりました。今回協力してくださった方々、本当にありがとうございました。

商・経営・経済学系統で県内初の博士後期課程を設置

—平成 23 年度から経営情報イノベーション研究科を開設—

今日の世界的な社会変動に対応するため、大学院経営情報学研究科経営情報学専攻（修士課程）を改組し、平成 23 年 4 月から「経営情報イノベーション研究科経営情報イノベーション専攻」を設置するとともに、同専攻に商・経営・経済学系統では県内初となる博士後期課程を設置します。

経営情報イノベーション研究科は、ビジネスをはじめとし、地方自治体などの公共分野、医療機関や福祉施設の分野、さらには地域社会など社会全体をフィールドとして考え、高いマネジメント能力と高度な情報技術によってより抜本的な改革、すなわちイノベーションを実現する、これからの社会を切り開く専門家の育成・教育を目指します。また、博士後期課程では、イノベーションの担い手を指導し、制度的な枠組みを主導的にアーキテクトする高度専門職業人、およびイノベーションに関する実務志向の研究者の養成を目指します。

修士課程	定員	入学定員：10 人 収容定員：20 人
	学位に付記する 専攻分野の名称	修士（経営情報学）
博士後期課程	定員	入学定員：3 人 収容定員：9 人
	学位に付記する 専攻分野の名称	博士（経営情報学） 博士（学術）

文科省「大学教育推進プログラム」に選定

国際関係学部 教授 立田洋司、助教 比留間洋一

このたび、文部科学省の平成 22 年度大学教育推進プログラム事業に、本学国際関係学部の取組「フィールドワーク型初年次教育モデルの構築」（責任者：立田洋司）が選定されました。本学の学部としては初めてのことであり、県内においても唯一の選定でした。

この取組は、国際関係学部の初年次教育として、国内外の 6 つのフィールドワーク（下枠参照）を試行的に実施し、また実施後に評価・効果の検証を行うことで、ヴィヴィッドな教育を築いていこうというものです。学生自らが課題を発見し、その解決に至るまでの一連のプロセスの中で主体的・能動的学習姿勢を身につけ始めれば、自ずと人間力は強まります。

実施期間は今年度から 3 年で、後期からすでに始動しています。参加学生の 1 年生約 50 人、上級生約 20 人が、『ムセイオン静岡』（※）の提供する授業などのほか、毎週 1 回以上のゼミを実施しています。他に、合同ゼミとして 12 月 8 日（水）には「危機管理セミナー」、12 月 17 日（金）には「奈良・春日若宮おん祭」研修も実施しました。

本プログラムをステップとして、国際感覚と教養・思いやりや実行力を備えた若人、言わば 21 世紀型地球市民がはばたいていくことを期待しています。

※ムセイオン静岡とは、静岡市の谷田丘陵地やその周辺地域の文教施設の連携により、学びの場を提供し、文化を発信する活動です。

〈6 つのフィールドワーク・ゼミ紹介〉

2 年間で各地にそれぞれ 20 人前後の学生を送り出す予定です。

- ① サンタフェ （米国のサンタフェに関するガイドブック作成プロジェクト）：藤巻光浩准教授
- ② シドニー （多様性文化の都）：澤田敬人准教授
- ③ ケニア （SUSPA 【静岡県立大学学生アフリカ支援プロジェクト】）：湖中真哉准教授
- ④ スペイン （サンティアゴ巡礼路、ムデハル、モサーラベ文化など）：立田洋司教授
- ⑤ ベトナム （ソンミ、ホーチミン市（ベトナム戦争の記憶））：比留間洋一助教
- ⑥ 日本 （能・狂言・伝統古典芸能、海外に紹介する日本文化）：岩倉さやか講師

大学間連携推進に向けてネブラスカ大学・リンカーン校 (UNL) およびカリフォルニア大学・デーヴィス校 (UC Davis) を訪問 -- 木苗直秀学長とともに

大学院生活健康科学研究科長 小林裕和

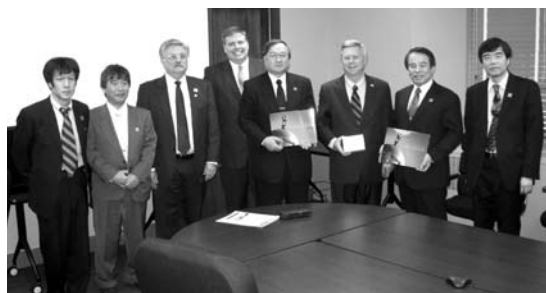
ネブラスカ州は米国の地理的中心に位置し、日本の本州ほどの面積に人より多い数の牛が飼われている。牛肉の生産が米国1位であることもあり、早速ビーフステーキの味覚を楽しんだ。極上品で日本では輸入制限の掛かっている生後21ヶ月以降のものであったことをその後知った。さて、ネブラスカ州との交流は2002年に遡る。この間、州知事および本県知事の相互訪問に加え、ネブラスカ大学のリンカーン校 (UNL) およびオマハ校 (UNO) を2004年に木苗現学長が訪問した。2009年10月には、パールマン学長がフローレス食品科学工学科長と共に来学し、本学との大学間協定が締結された。一方、カリフォルニア州は、静岡県と友好交流協定を締結しており、工業・農業において米国1位の生産額を有する。カリフォルニア大学・デーヴィス校 (UC Davis) は、食品栄養・植物関連研究分野では世界でトップクラスの評価を得ている。

11月20日(土)～22日(月)の訪問において、静岡県経済産業部の吉林章仁部長代理と同行できたので、ハイネマン州知事を含む州関係者との会談も

可能となった。本学として、県・州産業連携の一翼を担うべく、大学間連携を深めることの意義は大きい。今回、パールマン学長、フローレス学科長、ブラック生化学科長を含む10名程の研究者と懇談した。食品科学工学科を中心に、生化学科の植物およびバイオメディカル領域にまで輪を広げ、UNL教員による本学での集中講義を来年度から実施することとした。UNLと本学教員による共同研究テーマも多数見いだされたので、学生や若手研究者との研究交流を図りたい。併せて、UNLの英語教育のプログラムも活用することとした。

11月23日(火)は、カリフォルニア州デーヴィスに移動した。小林にとっては、2007年に継ぐ訪問であり、その際、ヴァン・アルフェン農環境科学部長およびパーティス生物科学部長との連携の打ち合わせを行っていた。また、柴本崇行農環境科学部教授には、既に本学客員教授をお引き受けいただいている。今回、レイシー副学長およびサイバー食品科学工学科長と会談し、これまでの実績を踏まえ、大学間連携協定締結を急ぐこととした。

訪問した2大学ともに、乳製品、ブドウ酒、オリーブオイル(写真)等、地元の産業に密着した研究・人材育成に力を入れていた。実りの多い訪米であった。



ネブラスカ州知事(右から3番目)との面談
訪問者全員 UNL の校章「N」を胸に着ける



UNL で生産されたアイスクリーム
木苗学長とフローレス学科長



UC Davis で生産のオリーブオイル

防災訓練を実施

県立大学では、11月11日(木)に防災訓練を実施し、教職員・学生約1,600人が参加しました。突発的な東海地震の発生に伴い、学部棟内で火災が起きたことを想定し、最寄りの避難場所への避難訓練を行ったほか、消火訓練や煙体験訓練、安否情報システムを利用した安否の登録訓練などを行いました。また、大講堂では、学生の防災ボランティアクラブ「防' z (ボウズ)」の協力により、AEDを活用した救急救命講習も実施しました。

去る9月には自衛消防隊の教職員を対象に、非常用発電装置の操作訓練や屋内消火栓及び屋外消火栓からの放水訓練を実施しており、防火・防災対策に全学を挙げて取り組んでいます。



芝生園地への避難訓練の様子

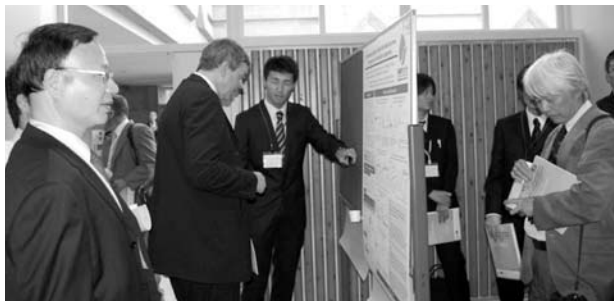
グローバルCOEプログラム

第3回 国際健康長寿科学会議の開催



本学の大学院薬学研究科と生活健康科学研究科は、「薬食同源」を基本的学術理念に掲げ、連携して国内における食薬融合を基盤とした健康長寿科学の唯一の拠点として、健康長寿科学分野の体系化の実現と有為な人材育成を目指した教育研究活動（グローバルCOEプログラム）を行っています。その教育活動および成果報告の一環として平成20年度から「国際健康長寿科学会議（ICHALS）」を定期開催しており、今回で3回目となりました。また、本年度は、第9回日中健康科学シンポジウムおよび第15回静岡健康・長寿学術フォーラムも同時開催され、4カ国から19人の外国人研究者が来学し、本学の教員や大学院学生を含む若手研究者と活発な意見交換や学術交流の場として多くの成果を上げる事ができました。

特別講演では、WHOの所属機関であるフランス・



若手研究者によるポスター発表

グローバルCOEプログラム拠点リーダー 今井康之
(薬学研究科長・教授)

IARCの部長、クリストファー・P・ワイルド博士と中国・浙江省医学科学院の技術科学部長の王茵（ワン・イン）博士による発表が行われました。それぞれ「食事とがんの研究から慢性疾患の解明へ」「中国における長寿者の食事の特性と食事改良への示唆」と題した講演で、健康長寿科学研究における他国の例として、有意義な発表となりました。また、同時にポスターセッションも行われ、59人による発表と討論を実施しました。このうち、中国、マレーシアの若手研究者および本拠点からの支援を受けている大学院学生、ポスドクによる32題のポスターをポスター賞の対象として、本拠点の事業推進担当者および外国人研究者が審査し、6人にポスター賞が授与されました。

本会議の開催を通じて、本学における健康長寿科学の教育研究活動を国内外に発信する事ができたと考えています。また、今後もこのような学術集会を継続して開催することで、薬食融合研究の更なる発展と、この分野における研究者や関連企業の連携の輪が一層広がる事を期待しています。



ワイルド博士



王茵博士

3rd ICHALS ポスター賞受賞者

武为（ウー・ウェイ）（浙江省医学科学院衛生学研究所・中国）

「人工ガラス繊維に暴露されたラット体内における FGF-7、IGFBP-5、カルメニンの発現変動」

ウォン・カー・フェイ（マラヤ大学生物科学研究所・マレーシア）

「薬用キノコ・ヤマブシタケ（*Hericium erinaceus*）は、末梢神経の圧挫損傷を受けたラットにおいて、神経軸索のタンパク質合成と後根神経節における Akt と MAPK の発現を促進する」

加藤竜也（生活健康科学研究科博士後期課程2年）

「ナノ粒子により誘発される *in vitro* および *in vivo* 遺伝毒性評価」

畑中剣太郎（薬学研究科・COE ポスドク）

「PET を用いたリポソーム化 siRNA の生体内イメージング」

モニラ・パービン（生活健康科学研究科博士後期課程3年）

「ヒト結腸ガン細胞及びマウス小腸におけるサイトカイン遺伝子発現におよぼすヤドリギレクチンの影響」

アフタブ・アマド（生活健康科学研究科・COE ポスドク）

「ヒトの健康長寿のための植物の利用：環境ストレスに対して植物を保護する遺伝子」

“産・学・民・官”の連携を考えるつどい2010を開催

11月26日(金)に「静岡県立大学“産・学・民・官”の連携を考えるつどい2010」を開催しました。

6回目となる今回は、「健康と長寿社会への大学貢献を考える」をテーマに、第1部「研究室公開・ポスター展示」、第2部「産学民官連携セミナー」、第3部「交流会」の3部構成で開催しました。

第1部「研究室公開」は、各学部棟で行われ、日頃の研究内容のポスターを掲示し、来場者に説明しました。小講堂では「企業ブース及び研究成果展示コーナー」を設け、学内15人の研究者が研究内容をパネルやポスター、試作品や試食品を展示してアピールしたほか、学外からも静岡県新産業集積クラスター、地元企業等13社・団体が出展し、多くの方々が展示内容の説明に熱心に耳を傾ける光景がありました。

第2部「セミナー」は、大講堂で行いました。途中、川勝平太静岡県知事から来賓挨拶をいただき、県の産業施策と県大が地域に果たす責務に対する期待を述べられました。

本学の取組として、木苗直秀学長が「本学の産学民官連携体制と健康長寿社会への貢献」を、経営情報学部の岩崎邦彦教授が「元気な中小企業の法則」と題して講演しました。次に、特別講演として、名

古屋大学名誉教授・愛知学院大学教授の大澤俊彦様より「健康長寿に期待される機能性食品“とは」をテーマに講演いただきました。

第3部は、学生ホールで「交流会」を開催しました。堀川知廣県経済産業部長の「乾杯」により、名刺交換や研究内容の情報交換など、学内外の交流が行われました。

このイベントを通じて、地域社会への貢献のあり方や産学連携のヒントを得られたものと思います。学内外の多くの方に御参加・御協力を頂きまして、厚く御礼申し上げます。



セミナー会場の様子



木苗学長が講演



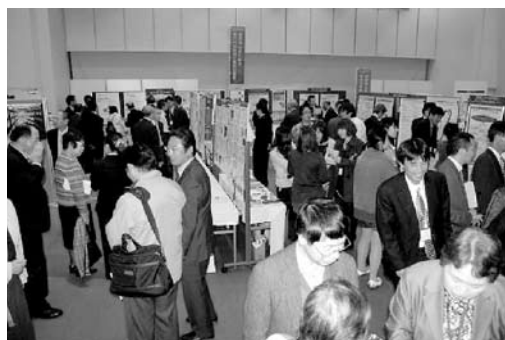
経営情報学部の岩崎教授が講演



川勝知事が来賓挨拶



名古屋大学の大澤名誉教授が特別講演



研究ポスター展示



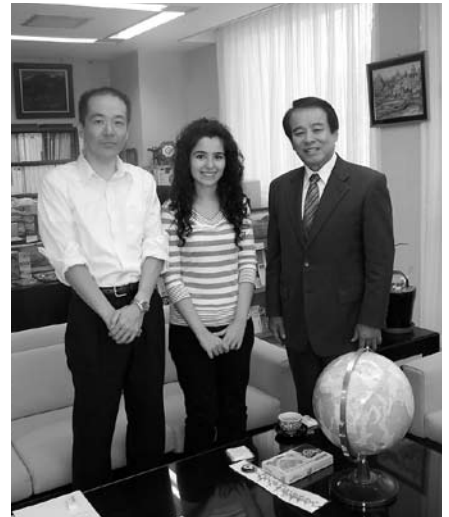
交流会

国際交流協定大学から短期交換留学生在来学

本学と交流協定を締結しているトルコ・ボアジチ大学からオズデン・オズキュさん、フィリピン大学からボリナオ・アンジェリカ・ロウ・デ・レオンさん、モスクワ国立国際関係大学からイワノフ・イリヤさんとシュミロワ・ジェニィさんが来日し、本学の国際関係学部で学んでいます。

留学生の皆さんに本学で受けている授業について聞いてみました。

ボアジチ大学から初めて迎える交換留学生であるオズデンさんは、英語の授業をおもに受けています。トルコの大学で専攻している英語教育については特に関心があるそうです。日本語の授業では、漢字を覚えるのに苦労しているようですが、日本文化の授業では深く知れば知るほど、トルコと似ている点があることに気づいたりして、ときどきびっくりするそうです。



オズデンさん（中央）



ボリナオさん（中央）

フィリピンにはない冬を体験することを楽しみにしているボリナオさんは、日本語やフィリピンの公用語であるタガログ語の授業やゼミに参加しています。留学生活は日本語をさまざまな角度から学べるよい機会になっているようです。タガログ語の授業では日本人学生とお互いの母国語を教えあったり、大好きなゼミでは、日本語の授業で学んだ表現をさっそく使ってみたり、他の学生の会話を聞いたりしながら楽しく日本語を覚えているそうです。

来日初日に「日本は夢だ。」と感動したイワノフさんは、とにかくすべての授業が日本語の勉強に貢献しているそうです。日本文化・外交、日本学研究、社会研究などの授業は特に面白く、さまざまな問題やテーマについて日本人の意見を聞くことが日本への理解につながっているようです。また、日本語の勉強以外に東洋の武術（合気道、太極拳）や音楽（ギター歴は7年、ハーモニカは昨年からはじめたそうです。）などアクティブな趣味も持っています。

日本に以前暮らしていたこともあるシュミロワさんは、日本文化に関する授業に一番興味を持っています。日本人の先生による日本文化の授業は、ロシアで受けていたものとはやはり一味違うようです。日本文化の具体的な点に触れることで、日本人のことがより分かってきたような気がするし、先生方も一人一人独特な見解を持っていて、とても勉強になっているそうです。



イワノフさん（中央左側）と
シュミロワさん（中央右側）

世界のファッション、歌、踊りを披露 留学生交流会を開催

10月2日（土）、留学生交流会を開催しました。会場となった県立大学学生ホール食堂には100人を超える参加者が集い、留学生や日本人学生が作った自国の料理、民族衣装のファッションショー、留学生の歌や踊りなどを楽しみながら、交流を深めました。

〈留学生のコメント〉

毎年、留学生交流会に参加しています。これまでも母国の自慢料理を披露しながら歓談することで交流を楽しんできましたが、今年は、母国の民族衣装や歌などを紹介するイベントを実施することを提案しました。

私にとって、民族衣装のファッションショー、演奏、ダンスなどの企画は初めての体験でしたが、他の留学生や教職員の方々に応援していただき、想像以上の成功になりました。世界各地の美味しい料理を食べ、故郷の歌を聴き、情熱的なダンスを見るなど、とても楽しい時間を留学生、日本人学生、教職員の皆さんと一緒に過ごすことができました。

世界の永遠の平和を祈って、また、異文化、言語の壁を超えるために、これからもこのような留学生と日本人学生の交流の機会を増やしていきたいと思っています。

（国際関係学部3年 ゲンミンタン／ベトナム出身）



世界のファッションショー



ミャンマーの踊り



民族衣装を着たベトナム人留学生



会場の様子

カリフォルニア州立大学サクラメント校 春期英語研修プログラムについて



調印式の様子

12月9日（木）、カリフォルニア州立大学サクラメント校生涯教育学部と本学薬学部、食品栄養科学部、国際関係学部、経営情報学部、看護学部との2010年度春期英語研修プログラム協定書調印式を行いました。同校への研修は2009年度から始まり、本年度は2年目となります。2011年2月28日（月）から3月25日（金）まで4週間の研修に、12人の学生が参加する予定です。

ニューカッスル大学夏期語学研修に参加して

国際関係学部 1 年 遠藤希

今回参加したニューカッスル大学夏期語学研修は、およそ1カ月という短期間でした。しかし、その中で私は様々な新しい事を経験することができました。

今回の研修への参加のきっかけは、私の有り余る好奇心からでした。大学生活のうちになるべく多くの国へ行くという目標を抱いていた私は、ニューカッスル大学参加者募集の掲示が出たとき迷わず「行こう!」と思いました。気付けば参加者の中に同じ1年生はいませんでした。そのあたりは全く気になりませんでした。参加を決めた後、先輩・事務局の方など多くの人の力を借りつつ、ハプニングを重ねながら現地の学校との連絡・旅券の手配などの準備を進めていきました。

ニューカッスルに着いて3日目から、大学のプログラムが始まりました。今回は県立大学からの6人に加えて日本の他大学から30人ほど、中国など世界各地から数十人ほどの参加者が集まりました。リスニング・ライティングテストを行った後、各クラス(10~15人ほど)に振り分けられました。私のクラスは日本人が私一人で、クラスメートの出身もドイツ・中国・台湾・コロンビア・スペイン・クウェートと世界各国、年齢も様々な大学生が集結していました。私はこのクラスで授業を受けた3週間、現実を思い知らされました。クラスメートのハイレベルな英語力に対する自分のレベルの低さです。私は高校時代にホームステイを経験してから英語が好きになり、コミュニケーションを中心に積極的に英語に関わってきたつもりでした。しかし、実際英語で授業をする中で、リスニング力のなさ、自分の意見をパッと英語で表現する能力のなさに愕然としました。はじめの一週間くらいは、“母国語のように

英語を話し、積極的に授業に参加するクラスメートに比べて自分は何なんだろう”と考えては泣きそうになっていました。そんなとき支えてくれたのは、私を受け入れてくれたホストマザーの“ここに何しに来たのか考えてごらん”という言葉です。その言葉をかけられて、私の目的は英語力をあげる事だと思い出しました。“3週間しかないのに、こんなこと考えていても時間の無駄だ!”と思い、学校生活に臨む姿勢を一新しました。授業はこれでもかというくらい積極的に参加し、授業以外でも進んで他の外国の学生に英語で話しかけ、なるべく沢山のひとと英語に関わる努力をしました。もちろん、いきなり英語力が上がる訳ではないし、そこにはまだまだ言語の壁がありましたが、学校に行くのが楽しくなりました。つたない英語を理解しようとしてくれるクラスメートや友達に恵まれ、自分自身も伝える努力を怠らないように心がけたことで、以前よりも英語のコミュニケーションを楽しめるようになりました。

最終的に研修を終えての一番の収穫は、“楽しい”だけで終わらなかったところです。自分の未熟さを真摯に受け止め、課題を再認識できる良い機会であり、これからの勉強に対する意欲に繋がったことは確実です。また、今回の研修は一人きりでは頑張りがきれなかっただろうし、日本・ニューカッスル共に自分の周りの方々の支えあってこそ実現したものでした。普段忘れてしまいがちな自分を支えてくれる方々の大切さを感じることが出来たこともまた、私の中で大きな収穫だったと思います。ここで得たものを忘れず、これからの生活に繋げていきたいです。

最後に、支えてくれた方々に感謝をこめて、ありがとうございました。



私(左側)とホストマザー



ニューカッスル大学の風景

オハイオ州立大学夏期語学研修プログラムに参加して

国際関係学部3年 打田千裕

私は大学3年の夏休みにオハイオ州立大学(OSU)語学研修プログラムに参加しました。このプログラムに参加したきっかけは、もともと留学に興味があり、長期休暇を使ってとにかく海外へ行きたかったからです。

コロンバスに到着して最初の日、初めて街を散策したとき(当たり前ですが)、文字も町の人みんな英語が使われていることに感動して、とてもわくわくしたことを今でもはっきり覚えています。

このプログラムの一番の売りと言ってもいいECP(English Conversation Partner)は私のオハイオでの思い出の大部分を占めています。パートナーの人たちは社会人やOSUの学生で、日本にとっても興味を持っていました。マンガや日本の歌手のことをよく知っていて、私の方が知らないこともよくありました。彼らが日本のことをよく知っているおかげで、日本語の微妙な違いや文化について話したりして会話は本当に盛り上がりました。午前中に授業を受けて午後は自由なので、パートナーにショッピングモールや動物園、パートナーのホームタウンに連れてってもらったり、宿題を見てもらったり、みんなでひたすらトランプなどのカードゲームをしたり、ほとんどの時間をパートナーと過ごして、たくさんの物を見たり食べたり聞いたりすることができました。

学校は月曜日から金曜日、9時から12時くらいまででした。内容はそれほど難しいものではなく、フィールドワークをしたり、オハイオの歴史を学んだり、プレゼンテーションをしたりしました。出発前から心配していたプレゼンテーションは本当に大変でした。テーマを提出しては赤ペンで真っ赤になって返されたり、アンケートの内容を提出してはこれまた真っ赤になって返って来て頭を悩ませたり、結果をまとめるにも最初決めたテーマから気付

けばずれていたり…(笑)。でもアンケートを取ることは本当にいい経験でした。知らない人に声をかける勇気を身につけ、頼んだ人全員が快くアンケートに答えてくれて、しかも話す



最終日にお気に入りのアイス屋で

機会が増える！！だんだんアンケートを取ることが楽しくもなりました。結果をまとめ、原稿とパワーポイントを作る時間は最後の週の4日間くらいしか残されてなかったので、準備を進めながらどれだけ遊ぶかとの勝負でした。結果のまとめられなさにパートナーにあきられることもありましたが、発表が終わったときは先生たちにも褒められ、自分の納得のいくものが出来上がり達成感でいっぱいでした！！

現地の子どもたちに日本の文化を教えるPassport Programも大きなイベントの一つで、私の班は習字と福笑いを教えてあげました。みんな興味津々で一生懸命遊んでくれました。子どもたちがカタカナで書いた自分の名前を親に嬉しそうに見せている姿を見て、私も本当に嬉しかったです。でも子どもたちの話す英語の単語は難しくなかったけど、容赦なく早かったので聞きとるのに必死でした…(笑)。

ここには書ききれないくらいぎっしりと詰まった3週間で、たくさんの思い出と友達を作ることができました。3年生は私一人でしたが、1、2年生の子たちが仲良くしてくれて県大での繋がりも広がり、パートナーと今もスカイプで話したりチャットをしたり、参加費は少し高額だったけれどそれ以上のものを得ることができたと思います。毎日サンドウィッチやファストフードだったことも今となってはいい思い出です(笑)。何よりも毎日どっぴりと英語に浸れたことがとても幸せでした！このプログラムに参加したことで英語がもっと好きになり、これから出来る限り長く何らかの形で英語と関わっていたいなと思いました。



みんなで行った Irish Festival

県民向け朝鮮半島情勢シンポジウム(静岡)と日韓大学生合同ゼミ(釜山)を開催

現代韓国朝鮮研究センター

本学の現代韓国朝鮮研究センターは、急変する朝鮮半島情勢について考えるシンポジウム「権力移行期を迎えた北朝鮮と東アジア」を、11月2日(火)に静岡市駿河区池田のグランシップで開催しました。財団法人霞山会との共催によるもので、財団法人静岡総合研究機構が後援しました。センター長の伊豆見元教授が「『金正日長寿延命体制』の確立とその課題」というテーマで報告したのち、「中朝関係：『主体』と『事大』のバランスシート」(堀田幸裕・霞山会研究員)、「南北関係：『統一』と『共存』のトレードオフ」(小針進教授)、「米韓関係：『同盟』と『同胞』のジレンマ」(奥蘭秀樹准教授)と、三つの報告がこれに続きました。

県民の皆さんの関心は高く、主催者側予想を上回る約100人が来場されました。このシンポジウムの3週間後、北朝鮮による韓国・延坪島砲撃で朝鮮半島情勢が緊迫化しただけに、今後もこのような県民向け研究報告の場が意味を持つと考えます。

一方、11月19日(金)、韓国・釜山にある東西



シンポジウムで報告する伊豆見教授(左から2番目、写真提供:霞山会)



議論が白熱した両国の学生による合同ゼミ(於:東西大)

大学では、同大で日本語を専攻する学生と、本学で韓国朝鮮事情について学ぶ学生による日韓合同ゼミが開催されました。現代韓国朝鮮研究センターは、東西大日本研究センターと学術交流協定を平成21年1月に締結しましたが、その交流の一環でもあります。本学からは小針ゼミ(国際関係学部)の3、4年生10人が参加し、東西大の学生約30人と「韓国併合100年と日本首相談話をどう思うか」というテーマで議論しました。「韓国人のナマの声を聞くことができた。質疑応答を繰り返していく中で、日韓関係の複雑さを改めて実感し、両国関係において何が必要かも考えさせられた」(国際言語文化学科3年生・竹内花織さん)、「韓日両国に係わる資料を基にして、互いに日頃考えていることを率直に話し合い両国の歴史的経緯を議論することができた。親睦を深めることにも役立った」(東西大日本語学科2年生・朴智倫さん)と、日韓それぞれの参加者は合同ゼミを振り返っています。



壇上に並んだ司会者とパネリスト:左から筆者、フリー編集者の増田幸弘氏、毎日新聞記者の野上哲氏、チェコビジネスパーク代表ミラン・フバーチェック氏、相山女学園大学の磯部錦司教授

シンポジウム 「プラハのシュタイナー学校」を開催

国際関係学部 准教授 小谷民菜

10月21日(木)、本学小講堂において、広域ヨーロッパ研究センター主催の公開シンポジウム「プラハのシュタイナー学校～日本とチェコで学ぶ子どもたち」が行われ、会場には多数の学外者を含めた84人の聴衆が集まりました。『プラハのシュタイナー学校』の著者である増田幸弘氏をはじめとする4人のパネリストが、シュタイナー教育の現場や日本とチェコの教育・社会事情について論じ、シンポジウムの終わりには、聴衆との間で30分にわたる活発な質疑応答が展開されました。

第4回薬学講座を開催

薬学部 教授 真鍋敬

薬学研究の第一線で活躍されている研究者による「薬学講座」が、9月28日（火）に谷田キャンパス大講堂で開催されました。第4回となる今回は、武田薬品工業株式会社で降圧薬「カンデサルタン」を開発した仲建彦博士、中外製薬株式会社で抗リウマチ薬「トシリズマブ」を開発した大杉義征博士をお招きし、大ヒット医薬品の発明に至る経緯や研究エピソードを話していただきました。薬学部生をはじめとする多くの聴衆が両博士の講演に聴き入りました。講演会終了後には、数十人の学生と両博士との交流会が催され、企業での研究に関する学生からの質問に、両博士とも熱心に応じておられました。



仲建彦博士



大杉義征博士

第3回排尿障害モデル動物研究会を開催

薬学部 教授 山田静雄

11月26日（金）、静岡市で第3回排尿障害モデル動物研究会を開催しました。この研究会は、排尿障害のメカニズムの解明と新規治療薬の開発を目的に、第1回を平成20年に、第2回を平成21年に静岡市で開催しました。本会の特色は、第一線で活躍中の泌尿器科臨床医を始めとして、製薬企業、大学などの基礎研究者が一堂に会し、具体的な「治療」に役立つ指向性を見出すことです。

今回は、特別講演としてカリフォルニア大学医学部のFred J Ehlert教授に、実験的糖尿病モデルでの膀胱機能異常に関する最新の研究を紹介いただきました。また、教育セミナーでは、浜松ホトニクス（株）中央研究所PETセンター長の塚田秀夫博士



多くの参加者で埋め尽くされた会場

にご講演いただきました。一般口述発表として、医学部や企業の研究者から排尿障害モデルを用いた最新の研究成果21演題の発表があり活発な討論が行われました。特に、「高齢ラットを用いた排尿機能研究」のセッションでは高齢化での排尿障害研究について議論していただきました。



教職員、学生の代表者がそれぞれ弔辞を述べました

実験動物慰霊祭

実験動物センター運営委員会

12月4日（土）、静岡県立大学小講堂において平成22年度静岡県立大学実験動物慰霊祭が執り行われました。慰霊祭には、木苗直秀学長をはじめ各学部・研究科の教職員、大学院生、学部学生、研究生をあわせて200人以上が参列しました。木苗学長から式辞があり、引き続き教職員を代表して薬学部・金子雪子助教、大学院生を代表して生活健康科学研究科・山内浩之さん、学部学生を代表して薬学部・福元北斗さんが、それぞれ弔辞を述べました。最後に参列者全員で、実験で犠牲になった動物の霊に黙祷を捧げました。

静岡三大学生命・環境コンソーシアム連携事業

野外講義「森林生態系の働きと多様性」を開催

大学院生活健康科学研究科 准教授 谷幸則・小林公子

静岡三大学（静岡大学・静岡県立大学・東海大学）生命・環境コンソーシアム推進協議会では、主に大学院の単位互換や連携講義開催などを通じて、3大学の教育・学術交流を進めています。今回は、その一環として静岡大学農学部附属中川根フィールドにおいて、野外講義「森林生態系の働きと多様性」を11月7日（日）に開催しました。県立大学から、生活健康科学研究科・食品栄養科学部の学生、スタッフ19人、東海大学海洋学部・海洋学研究科から11人、静岡大学から海外からの短期留学生3名を含む7人が参加しました。

静岡を出発し、島田経由で中川根に入り、大札山を經由して山犬段（海拔1404m）までの山道を、ピークを迎えた紅葉を見ながらバスで進みました。南アルプスに位置するこの地域は、大札薙、ゴボウ薙といった大規模崩落地（「薙」とは、大規模崩落地を示す）が多く存在し、現在でも、大規模な治山が行われているところで行われています。静岡大学農学部の逢坂興宏准教授（森林防災・水文が御専門）から、治山に関する説明を受けながら、地球の営みの大きさとそれに挑む人間の技術力の大きさを感じました。山犬段にある静岡大学演習林宿舍前で、昼食をとりながら、静岡大学農学部水永博己教授（森林生態・造林が御専門）から、ブナの豊凶の周期性・同調性やそれに関する生態学的理由などの興味深い話を伺いました。その後、現地スタッフである梶川泰一、宇佐美敦両氏のサポートを受け、森林生態観測トレッキングを行い、標高1562mの八丁段に到

着しました。当日は、天気恵まれ、遠くに富士山を見ながら南アルプスの眺望を楽しむことができました。休憩後、ホーキ薙の大崩落や崩落地形の稜線に生じる線状凹地など、特徴的な地質観察をしながら、スタート地点に戻りました。最後に水永先生から講義修了証書が参加した学生一人ひとりに手渡され、野外講義が終了しました。参加した学生へのアンケートでは、「参加して非常に良かった」「また参加したい」という意見が多く聞かれました。

このような体験を通じて、人間生活と自然環境の結びつきを学ぶことは、理系・文系や学部を問わずに、多くの学生にとって貴重な体験になると思います。今後、3大学の得意分野を連携させながら森林、山、海などをフィールドとし、農業や漁業などの食生産現場、防災や自然保護活動などを体験する新しい教育プログラムを開発していきたいと感じました。



野外講義参加者全員での記念写真（八丁段にて）

静岡環境フォーラム21を開催

環境科学研究所 教授 国包章一

11月27日（土）、B-nest（ビネスト）静岡市産学交流センターにおいて、静岡環境フォーラム21が開催されました。今年度は「エネルギーの明日を考える」というテーマを掲げ、住宅や工場における燃料電池やバイオガス化など新たなエネルギー技術と、それらを支えるスマートグリッドの将来像について講演が行われました。会場からは多数の質問や意見が寄せられ、活発な議論が展開されるなど、県民の方の関心の高さが窺われました。



「エネルギーの明日を考える」をテーマとした講演

環境科学講座を開催

環境科学研究所 助教 豊岡達士

環境科学研究所・地域環境啓発センターでは、静岡県くらし・環境部環境ふれあい課との共催により、「近未来の“エコマテリアル”を考える」をテーマに、「環境科学講座」を11月10日から12月1日までの毎週水曜日（全4回）に開催しました。講師は環境科学研究所の教員と静岡県工業技術研究所の研究員らが務めました。講演演題、講師は下表のとおりです。

参加者数は約70人で、本講座のテーマに対する関心の高さをあらためて知ることができました。また、各講演ともに活発な質疑応答がなされ、アクティビティーの高い講演会となりました。アンケートにも、充実した内容であり満足できたとの意見が数多く寄せられました。



講演の様子

開催日	演 題	講 師
11/10(水)	下水汚泥に存在するバイオマス資源セルロース	岩堀恵祐 教授(本学環境科学研究所)
11/17(水)	再生可能資源“セルロース”の高機能化	坂口真人 教授(本学環境科学研究所)
11/24(水)	古くて新しいエコマテリアル“炭”の魅力	山下理恵 上席研究員(県工業技術研究所)
12/1(水)	カニ殻キトサンから肌に優しい化粧品を創る	吉岡寿 名誉教授(本学)

ウェブサイト「環境リレーコラム」 「キャンパスの四季」をご覧ください！

環境科学研究所 広報委員：下位香代子、唐木晋一郎

「環境リレーコラム」は、2年前から環境科学研究所の教員がそれぞれのスタンスと興味で、「環境」をキーワードにコラムを順番に書き、研究所および大学院生活健康科学研究科環境物質科学専攻のホームページに掲載してきました。昨年の12月で全教員を一巡しました。また、「キャンパスの四季」は昨年からはじめただけで、掲載している写真はまだまだ素人写真ではありますが、キャンパス内の自然の一コマをとらえています。四季ごとに生命の輝きを掲載していきます。どちらも皆様に楽しんでいただけたと思いますので、紹介させていただきます。是非、下記のウェブサイトをご訪問ください。

■環境リレーコラム

<http://133.33.73.63/column/columns.htm>

■キャンパスの四季

http://kankyo.u-shizuoka-ken.ac.jp/four_seasons/index.htm



環境リレーコラム



キャンパスの四季

受賞

第22回佐伯喜一賞を受賞

国際関係学部の梅本哲也教授は12月4日(土)、第22回国際安全保障学会最優秀出版奨励賞(佐伯喜一賞)を受賞しました。この賞は「会員が著した安全保障・防衛に関する学術研究書」(国際安全保障学会HP)を対象とするものです。最優秀著書に選ばれたのは『アメリカの世界戦略と国際秩序—覇権、核兵器、RMA』(ミネルヴァ書房、2010年)で、その内容は『はばたき』第113号10頁に紹介されています。

平成22年度日本食品科学工学会中部支部大会で研究発表優秀賞を受賞

大学院生活健康科学研究科(食品栄養科学専攻)修士課程2年の幡野愛さん(食品分析化学研究室)は、11月27日(土)に名古屋で開催された平成22年度日本食品科学工学会中部支部大会において、研究発表



幡野愛さん

優秀賞を受賞しました。この賞は一般講演者の中で優秀な研究発表を行った学生または若い研究者に贈られるものです。幡野さんの演題は、「ブラジル産レッドプロポリスの赤色色素の解明と成分研究」であり、最も高い評価を受けました。

平成22年度子ども若者育成・子育て支援 功労者表彰(内閣府特命担当大臣表彰)

看護学部の太田尚子准教授が代表を務める、死産・新生児死亡を経験した家族のセルフヘルプグループ「天使の保護者ルカの会」を含めた聖路加看護大学看護実践開発研究センターの4事業は、11月24日(水)、内閣総理大臣官邸において、「平成22年度子ども若者育成・子育て支援功労者表彰、子育て・家族支援部門、内閣府特命担当大臣表彰」を受賞しました。「天使の保護者ルカの会」は、太田准教授が、聖路加看護大学大学院博士後期課程在学中の2004年9月に、研究センターの事業として立ち上げたもので、今年で6年目になります。これまでの事業が評価され、文部科学省からの推薦を受け、受賞に至りました。

平成22年度「静岡市民文芸」小説部門 の奨励賞を受賞

「静岡市民文芸 第六号」の小説部門において、環境科学研究所の内藤博敬助教の作品が奨励賞を受賞しました。「静岡市民文芸」とは、市民の創作と鑑賞を奨励する静岡市主催の文化事業として、市民からの投稿作品により制作されるコンクール形式の文芸誌です。

内藤助教の作品名は「感染子」で、平成23年1月31日(月)に発行された「静岡市民文芸 第六号」に掲載されています。1月15日(土)には、静岡市役所において授賞式が行われました。

総合食品学講座閉講式

総合食品学講座 事業推進委員

県立大学では、平成22年度フーズ・サイエンスヒルズ推進事業の一環として、消費者の安全・安心の求めに対応した食品製造と国際競争力のある食品を開発・商品化するための人材育成のため、総合食品学講座を開催しています。

11月5日(金)、県立大学で本講座の閉講式が行われました。本講座は、8月初旬から本学会場を中心に、県工業技術研究所会場等での実習を交え、約2ヶ月、合計74時間にわたって開催されました。所定の基準を満たした社会人受講生には、木苗直秀学長(フーズ・サイエンスセンター長兼務)と(財)しずおか産業創造機構の神谷聡一郎理事長の連名による修了証書が授与されました。また12月6日(月)には、基準を満たした学生枠受講生15人(本学食品栄養科学部生10人、同大学院生2人、静岡理工科大学理工学部生3人)に対して、



社会人枠閉講式(11/5)

食品栄養科学部長の中山勉教授より、講義科目課程修了証書が授与されました。次年度も、県立大学会場を中心として本講座が開講されます。参加をお待ちしています。



学生枠修了証書授与式(12/6)

医療に触れよう。体験しよう。 ～「メディメッセージ2010」で栄養士体験～

食品栄養科学部（フードマネジメント研究室） 准教授 市川陽子

10月23日（土）、24日（日）の2日間、「メディ・メッセージ2010」がツインメッセ静岡で開催されました。このイベントは、静岡県中部エリアの医療環境向上のために、子どもから大人まで、広く一般の方を対象に医療技術の体験や医療情報の提供を行うもので、2日間で約6,500人が来場しました。本学も協力団体として関わり、食と健康に関する正しい情報提供によって、病気を未然に防ぐ健康的な食環境づくりを実現することを目的に、お茶と生活習慣病予防に関する情報の提供（横越教授）、予防医療からみた食事に関する情報の提供（市川）、キッズ体験コーナーでの「栄養バランス判定ゲーム」（食品栄養科学部学生、大学院生活健康科学研究科（食品栄養科学専攻）院生32人がサポート）に参画しました。とくに、参加者が料理写真のカードを選んで夕食の献立を組み、学生スタッフが食事の栄養バランスを判定し解説して、望ましい組み合わせができるまでこれを続ける「栄養バランス判定ゲーム」は大盛況で、子どもから保護者、シニアまでが列を

作り、用意した1,000人分の「栄養バランスチェックカード」が、閉会時間を待たずになくなりました。最先端の医療技術を紹介するイベントの中で、もっとも身近な食事を通しての健康づくりにも参加者が大いに興味を示してくれた事実、あらためて我々の使命を感じました。はじめはぎこちなかった学生達も、回数を重ねるうちに対応が上手くなっていくのが印象的で、学年を問わず貴重な管理栄養士実践教育の場になったことと思います。



参加者の考えた献立に学生スタッフがアドバイス

●学生スタッフ

（M1）荒木香織、伊藤望、福羅光太郎（B4）池田恵美、杉山温子、戸澤香澄、袴田京、羽根あさこ、山岡愛子（B3）芥川晴音、大石貴菜、加藤恵、佐藤七恵、富坂真夕、中澤鮎子、永岡瑞穂、長谷川亜季、前田菜生、松下亜沙実、三浦真奈、諸星彩（B2）上田遼太郎、大代真実、杉浦文香、盛山夕紀子、服部加世子、古田和加奈、矢野おり（B1）佐々木香、長澤美沙、山田良明、山中瑞貴 ※ M：大学院生、B：学部生。数字は学年を表します。

教員人事、新規客員教授・准教授の紹介

（採用）

氏 名	部局名	職 位	採用日
米谷 民雄	食品栄養科学部	特任教授	22.9.1
新井 映子	食品栄養科学部	教 授	22.10.1

（退職）

氏 名	部局名	職 位	退職日
小林 晶子	生活健康科学研究科	助 教	22.9.15
鳥飼 浩平	薬学部	助 教	22.11.15

（昇任）

氏 名	部局名	職 位	昇任日
尾上 誠良	薬学部	准教授	22.10.1
熊澤 茂則	食品栄養科学部	教 授	22.10.1
林 久由	食品栄養科学部	講 師	22.10.1
ファイファー マティアス	国際関係学部	准教授	22.10.1
澤崎 宏一	国際関係学部	准教授	22.10.1
吉田 真樹	国際関係学部	准教授	22.10.1
岸 昭雄	経営情報学部	講 師	22.10.1

■客員教授・准教授

氏 名	所属・職名	区 分	期 間
森田 昌敏	愛媛大学農学部特命教授	客員教授	H22.10.1 ～ H25.3.31
太田 万里	光産業創成大学院大学准教授	客員准教授	H22.10.1 ～ H25.3.31
今井伸二郎	(株)日清製粉グループ本社研究推進部主査	客員准教授	H22.10.1 ～ H25.3.31

県大を走る! 第2回学長杯争奪学内駅伝大会



12月18日(土)、第2回学長杯争奪学内駅伝大会を開催しました。大学のグラウンドを出発し、県立美術館裏や芝生園地など学内約2.5kmのコースを、1人1周、1チーム5人で駆け抜けるこの大会には、30チーム計150人が出場したほか、応援やスタッフとして多くの学生・教職員が参加しました。

【優勝チームの言葉】

昨年から開催された駅伝大会に、男子サッカー部として2年連続参加しました。出場するからには、“優勝”を目標に、部活後の疲れた体に鞭打って、県大のきつい坂道を走る練習をしました。僕は小、中、高校のマラソン大会では、長い距離を自分自身と闘いながら走っていましたが、駅伝大会は、チームのメンバー全員がたすきをつないで走ります。各自の頑張り具合がチームの結果に影響するので、僕は一つでも順位を上げたすきを次の人に渡そうと懸命に走りました。

結果的には、今年も昨年を再現するかのように終盤に見事な逆転劇を演じ、2年連続で優勝カップを勝ち取ることができました。当初、部員の中には駅伝大会出場にあまり意欲的でない人もいました。やる気の温度差を解消するために大変な思いもしましたが、最終的にはサッカー部として2チーム出場

することができました。部員の関心を高められた証しでもあり、良かったなと思いました。この結果を心の糧に、来年の春から始まる新シーズンに向けて日々の部活動(練習)に励み、今年以上の成績を残せるように努力していきたいと思います。そして、「県大のサッカー部はしっかり活動している」ということを学内だけでなく学外にも強くアピールできたら良いと思います。皆さんも是非、僕たちに熱い応援をよろしくお願いします。

男子サッカー部主将 加納宏紀(経営情報学部2年)

男子運動部の部(参加:6チーム)

優勝/ニューギニュー特選隊♡(男子サッカー部) 47分59秒
倉島光司(経2),青木雄志(経3),加納宏紀(経2),川崎伸晃(経2),吉川純平(国4)

男子一般の部(参加:10チーム)

優勝/Tweeeeen 51分22秒
越智幹記(薬M2),岡本将克(薬M2),中村達也(薬4),定光慧(薬M2)

男女混合の部(参加:12チーム)

優勝/剣祭実行委員会 56分41秒
作田崇人(薬3),加藤みどり(国2),菊地隆司(薬1),倉富雅(薬1),吉田裕和(薬1)

女子の部(参加:2チーム)

優勝/ジョグ部女子チーム 56分50秒
佐藤睦美(国2),北村実穂(食3),日向浩子(食3),小西里沙(国2),大石奈穂美(食3)

男子区間賞 遠藤亮(生研究員) 8分33秒
越智幹記(薬M2)

女子区間賞 小西里沙(国2) 10分17秒



タスキをつなぐ瞬間



ランナーに熱い声援を送った応援の皆さん



ゴール!!

現在進行中!経営情報学部・国保ゼミの活動

■駐輪場カイゼンプロジェクト (3年 渡辺春菜)

私がプロジェクトをやろうと思ったきっかけは、自分で何かを最後までやりとげたいと思ったからです。そこで、不満に感じていた駐輪場を手段としてカイゼンを行っています。駐輪場カイゼンでは、現状から出てくる問題点を探し、カイゼン案を学内の教職員さんや学生にプレゼンしました。学生の参加率は少なかったのですが、教職員の方々にアドバイスをもらい、現在、事務局学生室の方々と協力して、体育館下の駐輪場の整理を進めています。しかし、駐輪場カイゼンの目的は整理ではなく、学生の安全です。学生が事故なく過ごせる、ストレスなく過ごせる環境づくりのために、今後も解決策を考え、それとともに、学生に現状や問題点をどうアピールしたら興味を持って自覚してもらえるかが課題です。

■学食カイゼンプロジェクト (3年 市川誠)

はばたき棟地下食堂(以下したしょく)は「広さや雰囲気」で満足度が低い、という結果が、アンケート調査で出ています。その点に着目し、愛知県の建築グループ studio nagoya さんとコラボし、したしょくのカイゼンに取り組んでいます。11月26日(金)に県大で開催された、「『産・学・民・官』の連携を考えるつどい2010」では、studio nagoya さんに製作していただいた、したしょくの模型と、提案内容をまとめたパネルを展示しました。

また実際に、したしょくのテーブルを縦長の配置に変更し、新たにコの字の動線を作ることで、移動

時のストレス軽減を図りました。以前より快適に移動でき、かつ一体感のある食事スペースを作ることが出来たと思います。

外部の組織とのコラボは、レベルの高い成果が出る反面、情報共有などに時間がかかるというデメリットもあります。スムーズにお互いの情報をきちり伝える、コミュニケーションの訓練が必要だと感じました。反省点も山積みですが、チームで一つの物を作る楽しさも改めて実感しました。

■第4回オープンゼミ (3年 鈴木規之)

10月20日(水)に、第4回オープンゼミ「誰でも街は変えられる!!」～NPO事務局長に学ぶ絶対成功するプロジェクトの作り方～を行いました。今回のオープンゼミでは、今までの反省点などを活かし、特に広報に力を入れました。具体的には、早めの告知を兼ねて、企画の進行状況をブログで公開するなどをしました。その結果、過去最高の49人の参加者を集めることができました。参加者の方から、学びを得ることが出来たという声も多数伺い、私たちの活動が地域に役立っているということを実感することができました。

また、講演者の方と直接打ち合わせを行い、目的やオープンゼミの価値を考えることができたことは、非常に勉強になりました。今回のオープンゼミでも反省点が多々浮かびましたので、次回以降に必ず活かしていきたいと考えています。



「『産・学・民・官』の連携を考えるつどい2010」で、したしょくカイゼン案を模型展示(左から市川、渡辺、鈴木)

はばたき寄金からのお知らせ

第13回スピーチコンテスト・第14回文芸コンクール・創造力啓発コンテスト

台風の影響で予定を1日繰り下げ、10月31日(日)はばたき寄金運営委員会主催で学生スピーチコンテストが「20年後の私と日本」をテーマに開催されました。参加者は、開催日変更等のため、昨年と比べて減少しましたが、参加者全員が熱弁をふるった結果、次のとおり入賞者が決まりました。

学生スピーチコンテスト入賞者

部 門	賞区分	所 属	氏 名
日本語の部(日本人) (参加者6、前年度4)	最優秀賞	国際関係学部	鈴木 平
	優秀賞	薬学部	成島 悠太
		薬学研究科	近藤 雅紘
日本語の部(留学生) (参加者5、前年度5)	最優秀賞	国際関係学研究科	カンカーニゲ ラージカ パワナマダウ ペレーラ
	優秀賞	国際関係学研究科	マワツタラゲ サンジーワ マナワラタナ
		国際関係学研究科	ヤント
英語の部 (参加者5、前年度14)	最優秀賞	国際関係学研究科	鄭 軒騫
	優秀賞	経営情報学部	鈴木 千世



熱弁をふるう参加者

学生スピーチコンテストに引き続いて、第14回学生文芸コンクールと創造力啓発コンテストの表彰式が行われました。応募総数は73作品(短編小説4、詩10、短歌5、俳句8、川柳32、ノンフィクション2、イラスト9、その他1、評論・エッセイ2)で、新たにイラスト部門を加えたこともあり、昨年の59作品を大幅に上回りました。各部門の入賞者は次のとおりです。

学生文芸コンクール入賞者一覧

部 門	賞区分	作 品 名	所 属	氏 名
短編小説 (応募4)	優秀賞	空花筵	看護学部	大谷 美緒
	佳作	精一の人	食品栄養科学部	壁屋 薫
	努力賞	はじまりは、ほんの些細なことでした。	国際関係学部	山村 弥生
詩 (応募10)	優秀賞	高校時代	国際関係学部	伊藤 桃
		亡くしもの	食品栄養科学部	守屋智恵美
	佳作	爆胎	看護学部	大谷 美緒
		一蓮托生	看護学部	大谷 美緒
		通学	経営情報学部	小竹 亮平
	努力賞	自分	薬学研究科	近藤 雅紘
		眩空	国際関係学部	伊藤 桃
短歌 (応募5)	優秀賞	時に追われて詠める 他	国際関係学部	馬場 歩
	佳作	夏過ぎの天王山 他	薬学研究科	進藤 雅弘
		人間われ…	国際関係学部	岩瀬満帆子
	努力賞	生物系研究室あるふある 他	薬学部	成島 悠太
		秋風 他	生活健康科学研究科	澤頭 美緒
俳句 (応募8)	優秀賞	最後の1年 春から秋へ	食品栄養科学部	戸澤 香澄
	努力賞	設定温度26度 他	薬学部	成島 悠太
		県大の名所 他	薬学部	室伏 琢磨
		帰り道 他	薬学部	森下茉莉子
川柳 (応募32)	最優秀賞	10% 他	食品栄養科学部	関 沙織
	優秀賞	時事 他	薬学研究科	畠中 俊
		昼間ない&ひるまない 他	薬学研究科	市川 拓也
		奇跡 他	薬学部	森下茉莉子
		政治 他	薬学部	池本 啓祐
	佳作	秋 他	薬学部	西村麻衣子
		本文	薬学研究科	筒井 陽仁
		写真 他	薬学研究科	板垣 宏亮
		旅	薬学研究科	近藤 雅紘
		貧乏大学生 他	薬学部	滝口 茂幸
		糸詩(愛し) 他	国際関係学部	朱 偉鵬
		鍋囲み… 他	生活健康科学研究科	飯尾美沙子

川柳 (応募32)	努力賞	うつにならないために 他	薬学部	室伏 琢磨
		ワールドカップ 他	食品栄養科学部	富岡 三貴
		どんぐりと… 他	国際関係学部	本山 緑
ノンフィクション (応募2)	努力賞	カナダに宿るフランス	国際関係学部	高橋 哲也
イラスト (応募9)	最優秀賞	「静岡海のもの、山のもの、野のもの」	薬学部	大川 寛代
	優秀賞		生活健康科学研究科	村尾 咲音
			食品栄養科学部	守屋智恵美
			薬学研究科	尾山 大
	佳作		薬学部	長谷川由紀子
その他 (応募1)	最優秀賞	輻輳	看護学部	大谷 美緒
評論・エッセイ (応募2)	佳作	エコについて考える	生活健康科学研究科	圓尾 和紀
		ある日、誰かに言いました。	国際関係学部	伊藤 桃

創造力啓発コンテストの応募総数は17作品で、昨年の9作品からほぼ倍増となりました。入賞者は次のとおりです。

創造力啓発コンテスト入賞者一覧

賞 区 分	アイデアの内容	所 属	氏 名
優秀賞	情報技術を生かした静岡県立大学のPR活動	薬学研究科	近藤 雅紘
アイデア賞	部分おりたたみ自転車	生活健康科学研究科	岩田 雅子
	ADOめし	経営情報学部	伏見 美希 他3名

モスクワ国立国際関係大学短期交換留学生へ奨学支援金を授与

本学と交流協定を締結しているモスクワ国立国際関係大学への本年度の短期交換留学生として派遣された西岡美紗代さん（国際関係学部言語文化学科3年）及び同大から本学に短期交換留学生としてお見えになったIvanov,IlyaさんとShumilova,Evgeniyaさんに奨学支援金が木苗学長から授与されました。



学長室にて西岡さん（中央）と島田教授（左側）



学長からイワノフさん（左側）とシュミロワさん（左から2人目）に奨学支援金授与

はばたき寄金に寄附をして くださった方々

山田静雄（薬学部）、下位香代子（環境科学研究所）
 中山勉（食品栄養科学部）、小谷野俊夫（国際関係学部）
 三輪真知子（看護学部） 他 匿名希望者
 （敬称略） [平成22年4月～11月分]

活躍する卒業生・修了生

～経営情報学部・経営情報学研究科編～

学ぶ姿勢－社会人になっても持ち続けたい

2009年3月 大学院経営情報学研究科修士課程修了
伊豆の国市役所勤務 佐藤友美

早いもので大学院を修了して1年半以上が経ちました。私は他の4年制大学を卒業し、社会人1年目になる年に、社会人学生として県立大に入学しました。在学中は小島茂教授のもとで、まちづくりについて学びました。

私は伊豆の国市役所に勤めています。伊豆の国市は伊豆半島の中央部に位置する人口5万人弱の市で、市の中央には狩野川が流れ、山々や田畑に囲まれた自然豊かな温泉観光地です。また、江川太郎左衛門英龍が活躍した場所でもあり、歴史的に有名な江川邸、葦山反射炉もあります。私は今年で入庁4年目に入り、現在は市民部市民サービス課で仕事をしています。総合窓口、市役所の顔であるため、来庁者へのあいさつ、声かけ、丁寧な対応を心掛けています。主な業務は、住所異動、住民票戸籍等の証明発行、パスポート申請交付です。その中でも主担当の業務は戸籍の届出受理・審査・記載です。戸籍担当になり、3年目になりますが、まだまだ一人前とは言えず、勉強の日々です。他の市町と合同で開催される研修に参加したり、今年は講師として「出生」について戸籍初任者を対象にした講義をさせていただく機会もありました。近年は日本人と外国人との届出を受理する機会も増え、その際には、日本法だけでなく、外国の法律にも抵触しないかどうか審査する必要があると、多くの知識と経験が求められる仕事だと感じています。

大学院在学中は、仕事と勉学の両立が大変だということもありましたが、周囲の配慮や支えのおかげで両立することができました。修了後は仕事一本になり、自分の趣味であるテニスをやったり、国内外の旅行に行ったりしています。

また、今、市職員の有志で構成されている「研鑽道場」と名づけられた、市職員としてのスキルをアップさせるための研修会に参加しています。月に2回のペースで業務終了後2時間程度、法律を学んだり、グループワークをやったり、外部から講師を招いて講演を聞いたりしています。私は観光の分野に興味があり、修士論文のテーマも市の温泉観光地をPRするための内容でした。修了後、なかなか観光地として発展するために尽力できていない気がしますが、今度、この研修会の中で、修士論文の内容について紹介する機会をいただいたので、職員の方にも話を聞いてもらい、新たな方向性が模索できればと思っています。

社会人として、市職員として、環境や手段は様々でも学び続けるという姿勢をこれからも持ち続けたいと思っています。

★次回は、看護学部・看護学研究科編を掲載します。



勤務先の伊豆の国市役所



歴史的に有名な葦山反射炉

研究者を目指して ※研究者として国内外で活躍する卒業生・修了生を紹介するコーナーです。

歳のいった「若手」研究者として

2008年3月 大学院経営情報学研究科修士課程修了
静岡大学人文学部経済学科助教 狩野美知子

私は、1978年より静岡大学人文学部助手として法経資料室（のち、経済資料室）に勤務し、専門雑誌の受入れ・管理や大学紀要の編集といった仕事をしていました。大学時代は法律を専攻していたのですが、資料室で働くうちに情報処理や簿記に興味を持ち、散発的に経済学関連の勉強をしていました。県立大学大学院経営情報学研究科では夜間の講義を行っているということを知り、科目等履修生で「経営戦略特論」を受講したのをきっかけに、系統的に経営学の勉強をしたいと思い、2006年に経営情報学研究科に入学しました。

大学院を修了した後、職場に職務変更を願い出て助教となり、2009年4月から名実ともに経済学科教員の一人となり、50歳代の「若手」研究者としてデビューしました。ただし、午前中は従来のように経済資料室で雑誌の受入れ・管理を行い、午後からは研究室で教育と研究に従事するという変則的なものです。現在は、情報処理、経済英語、経済情報処理といった科目を週に2コマほど教えつつ、旅行産業の競争戦略および観光による地域振興を大きなテーマとし、伊豆地域の観光データの収集・分析、観光産業の実態調査に取り組んでいます。

私は、もともと職場が静岡大学であり、助手とは言いながらも正規の教員ポストであったため、大学院在学中から論文発表の機会にも恵まれ、現在（2010年12月）、単著の論文5本、共著の研究ノート等10本と短期間に一定の成果を上げることができました。これらの多くはインターネットで公開されているため、思いもよらないところから原稿依頼があったり、直接あるいは電話で意見を求められたりと、研究者としての社会的役割を認識しています。直近では、日本テレビの「所さんの目がテン！」という番組スタッフから電話が入り、私の「目がテン」になりました。残念ながらこの件に関しては質問に対する的確な理論を紹介できませんでしたが、改めてインターネットの威力と怖さを認識しました。

大学院在学中は、ほとんど毎晩3時ころまで勉強をしました。当時はとても大変でしたが、集中的に経営学に関する勉強をしたため、受講した各授業の

内容が面白いように私の頭の中でつながり、知的興奮も経験しました。正直言って、修士論文を書くことはとても大変な作業でしたが、先生のご指導と頑張るゼミの仲間たちのおかげで何とか書き上げることができました。私は尹（ユン）ゼミに所属していましたが、不思議なことに自分がいくつであっても、また周りの人が何歳であっても「先生は先生、仲間は仲間」であり、ゼミではとても楽しくかけがえない時間を過ごしました。このゼミの先生や各地で頑張る仲間たちは今でも私の自慢であり支えです。

私は、職業柄どうしても県立大学と静岡大学を比べてしまいがちですが、県立大学には良いところがたくさんあります。なによりも、大学規模がこじんまりしている分、教員と学生の距離が近く指導がていねいであり、学生たち（少なくとも、学部から大学院に進んできた私が知っている人たちが）が良く勉強をしています。また、経営と情報の両方を学ぶことができます。現に、私は経営系のゼミに所属していましたが、情報系の先生や学生からもいろいろと教えていただきました。そして経営系のスタッフが充実していることは言うまでもありません。就職難のニュースを多く耳にする昨今ですが、県立大学の学生さんたちは、こういった県立大学の良さをウリに頑張ってください。

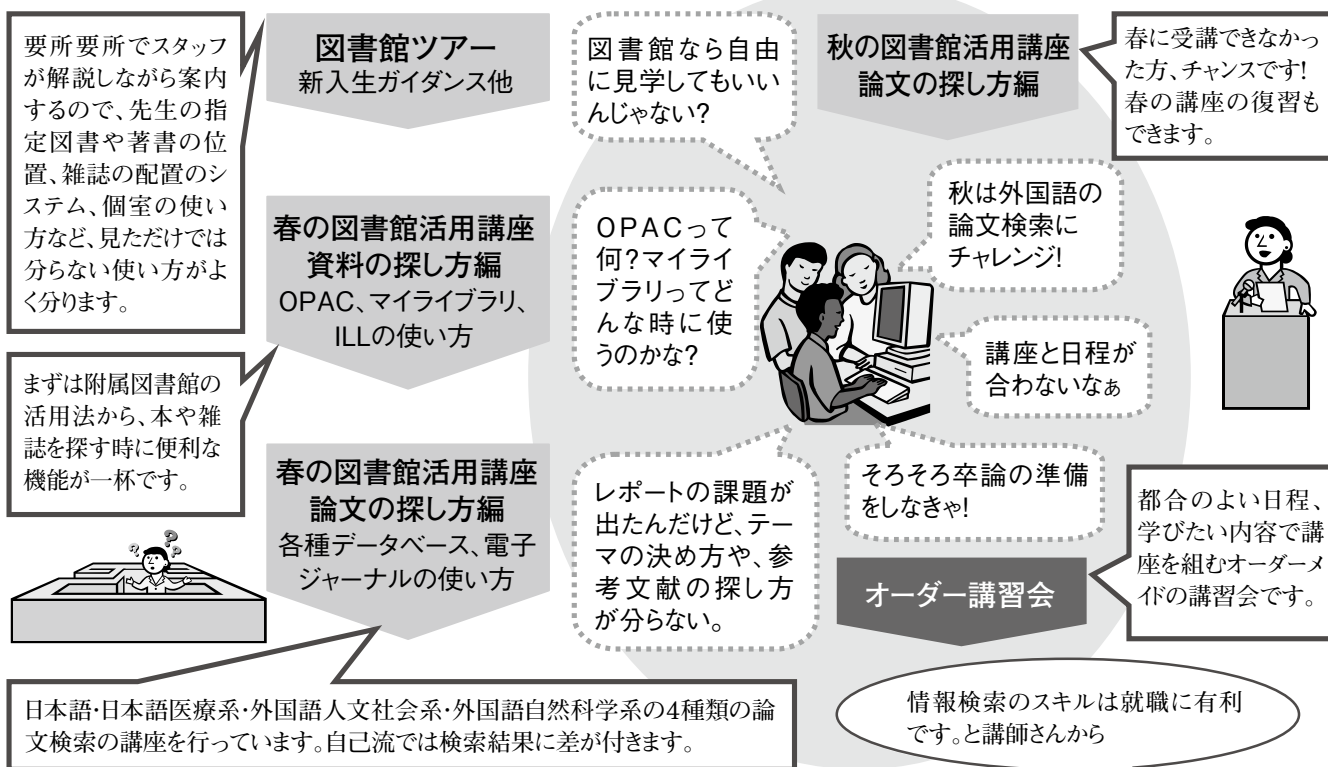


研究室にて

図書館だより

図書館活用講座で、情報検索のスキルアップ!

そったく
 啐啄という言葉があります。鶏の雛が卵の殻を中からつつく音に応じて母鳥が外から殻をつつき破ることを表しています。図書館ではこの言葉を念頭に置き、活用講座などを通じて皆さんに情報活用能力養成の機会を提供したいと考えています。講習会の内容や日程についてはご要望に柔軟に対応します。お気軽にご相談ください。



パソコン室での文献検索実習の様子、その後図書館に移動して演習

授業単位の講習会

オーダー講習会は個人(2名から)・授業・ゼミ単位でもOK

熱の入った講師の説明に、皆さん熱心に聞き入っていました。最新情報を知るチャンスでもあります。

専門講師を招いての講習会



SciFinder Scholar 講習会

本学先生からの寄贈著書

平成 22 年 8 月 13 日から平成 22 年 12 月 2 日までに先生方から寄贈していただいた著作資料は次のとおりです。

・津富宏先生 (国際関係学部)

『ランダム化比較試験 (RCT) の設計 ヒューマンサービス、社会科学領域における活用のために』
 D.J. トーガーソン、C.J. トーガーソン 共著 津富宏ほか監訳 日本評論社 (499.4/To 66)

・小浜裕久先生 (国際関係学部)

『経済論文の技法 データが語る・データで語る』 小浜裕久著 日本評論社 (330.7/Ko 27)

・赤井周司先生 (薬学部)

『化学構造と薬理作用 医薬品を化学的に読む』 柴崎正勝ほか監修 赤井周司ほか執筆 廣川書店 (499.3/Ka16)

シリーズ 私の1冊の本

このコーナーでは、先生方がこれまでに読んで感銘を受けた本や印象に残っている本を紹介しています。紹介されるのは、専門分野に関連した興味深い本のほか、専門とは全く異なるジャンルの本のこともあります。内容は多彩で、授業とは一味違う切り口による専門分野の解説のほか、思いがけない趣味や人生体験の披露などに先生を身近に感じられるかもしれません。ここで紹介する本は、図書館で受け入れていますので、是非一度この機会に手にしてみてください。

国際関係学部 講師 坂巻静佳

紹介図書名：『**放っておいても明日は来る 就職しないで生きる9つの方法**』

著 者 名：高野秀行

出版社名：本の雑誌社

I S B N：978-4-8601-1200-4

図書館所蔵：閲覧室2階 469.2/W92



大学4年生の春、私は就職活動をしていました。特段やりたいこともなければ、特段目指す会社があるわけではなく、いま思うと何も考えていませんでした。しかし、とにかく来年の春からの収入源と居場所を確保しなければという焦燥感で、よく知らない会社に応募しては、よくわからない内に落とされたり、あからさまに落とされたりして、泣いて泣いて落ち込んで、この先どうなるのかと暗い毎日をおくっていました。その時の自分が出会っていれば、そう思ったのがこの本です。

この本は、作家の高野秀行氏が自分のお知り合いの方にこれまでの人生を伺った対談をまとめたものです。ここに描かれている人生は予想だにしない強烈なものばかり。農学部卒業後就職するはずのマレーシアの会社が就職前になくなり、引くに引けずに行ったマレーシアで職を転々としたのち、薬用植物調査会社を設立、生物資源ビジネスを展開しているひと。日本で会社勤めをしていたのに、キックボクシングにのめりこみ、タイに行って、キックボクシングに似たムエタイの選手になってしまったひと。会社を辞めて旅行に行った沖縄にそのまま住みつき、現在沖縄で映画をつくっているひと。職を転々とした後、ミャンマーで欧米旅行会社向けの辺境専門現地手配会社を起業したひと。米国の美術大学を卒業した後、親友にひきずられて嫌々行ったバンコクでバンドを結成したことを契機に、音楽でたべていくことになったひと。会社を辞めて作った映画館が閉館、その後ライターになり、ピエンチャンにカフェを出店したひと。NGOで派遣されたチャドからの帰国後、その報告のイベントで訪れた屋久島にそのまま住み着き、エコツアーガイドになったひと。学生運動に参加して逮捕・投獄されたため韓国で就職のあてがなく日本に留学、帰国後起業した企業の倒産を経て、日本の本を翻訳する出版エージェンシーを設立したひと。以上の説明では到底説明し尽くせない、予想を裏切る突拍子もない話の展開に、頁をめくる手が止まりませんでした。

読み終わった瞬間、ここで語られている生き方は私には無理だと思いました。このような人生は私にはありえない。平凡で安定した予測可能性の高い人生を生きるために精進しようと心に誓いました。しかし、他方で、こういう生き方もあるのか、それでもたべていけるのかとぼんやりと思いました。私が目にし、想像しうる世界は自覚している以上に狭い。私が予想し、思い描く人生は、豆粒のように小さな「私の世界」のなかで私が考えた生き方でしかない。想定していたラインからドロップアウトしても、世界はそれでは終わらない。想定していなかったラインが続いていく、なるようになる、ただそれだけなのです。

高野氏はあとがきでこう書きます。「さんざんユニークな人間のユニークな生き方を紹介しておいてなんだが、できれば普通に生きるのがいいと思う。……だが、もし普通の人生からドロップアウトしてしまい最悪こういう人生になる一と思ったらどうだろうか。……これが『最悪』となれば、『最悪』も意外に悪くない。」

大学4年生の私がこの本を読んでも、きっと「ここで語られている生き方は私には無理だ。」と思ったことでしょう。そしておそらくもっと真剣に就職活動に取り組んだに違いありません。そうだとすると、この本で繰り広げられる予測不可能な人生の数々は、僅かかもしれないけれども当時の私を当時の「私の世界」から解放し、少しは楽に就職活動ができるようにさせてくれたのではないかと思います。



関西薬学生バドミントン大会で6連覇を達成!

バドミントン部顧問 井口和明（薬学部 講師）

県大バドミントン部は、8月14日（土）から5日間にわたり、京都府向日市で行われた関西薬学生バドミントン大会において、男子団体戦で優勝、6連覇を達成し、大会史に金字塔を打ち立てました。本大会は今年で第64回を数える歴史ある大会で、西は神戸、東は静岡までの薬学部、薬系12大学から400名もの参加がありました。

男子団体戦は、予選リーグを順当に突破し、決勝では富山大と競り合い、みごとに優勝しました。個人戦においても、多くのトロフィーを獲得し、静岡県立大学の名を轟かせました。

さらに、10月に岐阜で行われた第45回東海医歯薬バドミントン大会（東海地区の医・歯・薬学、福祉系大学が会場）でも、男子団体戦で破竹の勢いで勝ち進み、優勝旗を手にしました。

県大バドミントン部は、前身の静岡薬科大学からの伝統を引き継ぎ、男子と女子が一緒に練習し、厳しい中にも“楽しく”をモットーに、バドミントンを楽しみ、スポーツを楽しみ、人生を楽しむために皆がそれぞれ努力して素晴らしい雰囲気をつくっています。これが今回の優勝への原動力になりました。毎週火、水、金曜日が練習日なので、バドミントン

に興味がある方は、是非、体育館まで見に来てください。大学に入ってからバドミントンを始めた人も多く、初心者大歓迎です。

<関西薬学生バドミントン大会成績>

■男子団体戦優勝

大学院薬学研究科2年：藤谷、伊藤／薬学部5年：丸山／4年：鎌田、斎藤、猪田、和田／3年：加藤／2年：永井、村尾／1年：渡部、岩本、寺田。

■個人戦成績

男子シングルス優勝（薬学部2年 永井）

同3位（薬学部5年 丸山）（薬学部1年 渡部）

男子ダブルス準優勝（永井&渡部組）



関西薬学生バドミントン大会の会場で

7期津富ゼミ生と子どもたちで草薙商店街のPRソングを作りました

この企画の主催者である本学国際関係学部の津富ゼミでは、「地に足のついた社会貢献」というテーマのもと、毎年様々な企画を行っています。私たち7期生は、地域活性化に焦点をあてて活動することにしました。企画がゼミ生の自己満足で終わらないように、草薙地域の方たちを交えた話し合いをした結果、この商店街のPRソング作りに取り組むことに決めました。

地元の幼稚園、小学校、中学校から参加者を募り、10人の子どもたちに協力してもらうことになりました。子どもたちは、主に夏休みを利用して、商店街を探検したり、お店の人にインタビューをしたりしました。その体験をもとに、歌詞を考えたり、楽器を手作りしたりと、本当にがんばってくれました。

このPRソング作りを行う最大の目的は、商店街のさらなる活性化に他なりません。そのためには、子どもたちを含めた地域の人々に、地元に対する愛着（の気持ち）をより深めてもらうことが不可欠です。地域の子子どもたちが歌作りをする過程を通じて、世代の異なる人同士の交流が生まれ、この草薙地域がもっと盛り上がることを願っています。

この企画の主役は、歌を作ってくれた子どもたちであり、それをサポートしてくださった地域の方々であり、今その歌を聴いてくださっているあなたです。いまままで協力してくださった多くのみなさん、本当にありがとうございました！



一緒に歌を作った草薙の子どもたち

県大生ピックアップ！

細澤 あゆみ さん

大学院経営情報学研究科修士課程 2 年
静岡市出身、22 才

学部 1 年生のときから、数学研究室（鈴木直義教授、以降数研）に所属し、数々のシステム開発のプロジェクトに携わってきた細澤さん。手がけたプロジェクトが地域情報化・地域人材育成の成功例として総務大臣から表彰を受けたり、飛び級での大学院進学後には米国で開催された大規模なソフトウェア開発カンファレンスに派遣されるなど様々な活躍を続けています。

元々、情報系には強かったのですかー

大学入学前は、情報系について本当に人並みの知識しかありませんでした。そもそも、経営情報学部を目指したのは、祖母がおにぎり屋をしており、その店を継ぎたい、つまり経営者になりたいと思っていたから。

情報系の研究室に入った理由はー

経営者になるという志を形にするためには、経営系の知識のみならず、情報系の知識や技術も身に付ける必要があると思ったから。実際に入って今まで活動してきた中で、数研のプロジェクト指向の活動方



法は、学生を成長させるベストなやり方だと思います。

プロジェクトで忙しい毎日を過ごしているようですがー

納期前などは徹夜になることもあるけれど、充実していると感じます。プロジェクトに取り組むことは、自分に対する投資だと思っているから苦にならない。その際大切にしているのは、受身ではなく自ら動きに行くということ。今春、大学院を修了して東京の会社に就職しますが、社会で求められる人材というのも、そういうことができる人なんだと思います。

※数学研究室の詳しい活動を知りたい方はこちらへ
数学研究室 HP

<http://sukun.u-shizuoka-ken.ac.jp/>

「ふりーらフルーラ」がグッドデザインしずおか大賞を受賞



682 円／4 種類 いちご（紅ほっぺ）、静岡茶、三ヶ日みかん、アメーラ®（トマト）と素材はすべて静岡特産のブランド野菜やフルーツを使用。

県内の中小企業が生産・開発した製品を対象に選ぶ「2010グッドデザインしずおか」において、デザート用のふりかけ「ふりーらフルーラ」（愛称「ふりフラ」）が最高賞の大賞を受賞しました。

この製品は、2008 年に行われた SOHO ビジネスプランコンテストで最優秀賞を受賞した、本学経営情報学部の学生（岩崎邦彦教授のゼミに所属）のビジネスプラン「静岡の特産物を使ったデザートのためのふりかけ」をベースに誕生しました。学生のプランを、静岡県商工会連合会が連携拠点となり、静岡県内の一次産業、二次産業、三次産業が力を結集して製品化にこぎつけました。「学生×1次産業×2次産業×3次産業」という新たな連携の成果が、「ふりフラ」です。この製品には、「静岡の果物・野菜の魅力を、今までになかった商品で、全国に発信したい」という、学生の思いがつまっています。

“ふりフラ”は、現在、通信販売等で購入することができます。

大学オリジナルグッズを製作しました

静岡県立大学は昭和 62 年に開学し約 24 年の歳月が経ちます。開学以来数多くの学生が卒業し社会の様々な分野で活躍しています。卒業後も多くの O B、O G は、瀟洒なレンガ造りの学舎や指導を受けた恩師の元を懐かしく訪れてくれます。

こうした卒業生や在学生、またオープンキャンパスに訪れた高校生や保護者から本学にちなんだ記念になるグッズが欲しいという声が多数あり、オリジナルグッズ（マフラータオル・Tシャツ）の製作に至りました。Tシャツは、校章・英語名を組合せたシンプルなデザイン、マフラータオルはそれと校舎のレンガをイメージしたものになっています。

本学では、学園祭等の大学行事に訪れる来学者・卒業生に紹介するとともに、在学生が活躍する校内のスポーツ大会等を通じて活用していきます。

これらのグッズが、在学生や卒業生の愛校心を醸成することも期待しています。なおオリジナルグッズは大学売店で誰でも購入することが出来ます。

（問い合わせ先 静岡県立大学販売協力会 電話 0 5 4 - 2 6 2 - 7 7 0 5）



マフラータオル …… 1,200 円 / 本
Tシャツ …… 2,100 円 / 枚
全 3 色（ブラック・サックスブルー・ピンク）
サイズは S・M・L の 3 種類。

ニュース&トピックスを公式サイトへ！

教職員・学生の皆さんの受賞、研究成果の発表、研究助成採択、イベントの案内、クラブ・サークル活動報告、ボランティア活動など様々な情報について、県大公式サイトへの掲載をお願いします。また、「はばたき」への寄稿もお待ちしております。

・公式サイトへの掲載方法は、以下のページをご覧ください。

公式サイトトップページ→学内専用情報→情報発信について

・「はばたき」寄稿は、広報室（はばたき棟 3 階）へお願いします。

E-mail:koho@u-shizuoka-ken.ac.jp

発行 広報委員会

お問い合わせ先 静岡県立大学事務局広報室（TEL 0 5 4 - 2 6 4 - 5 1 3 0）

静岡県立大学ホームページアドレス <http://www.u-shizuoka-ken.ac.jp/>

2月23日は「富士山の日」です。富士山について、学び、考え、想いを寄せよう。

